

# クローズアップ NGO・NPO

特定非営利活動法人

アクセス・共生社会をめざす地球市民の会  
事務局長 野田 沙良

**国際協力を、専門家にしかできない活動にしない**

## ■ 企業に支えられた時代から、 ■ 市民が創る国際協力NGOへ

アクセスが設立されて25年。私たちは試行錯誤を繰り返しながら、日本とフィリピンで貧困問題を解決するための活動を広げてきました。設立当初は、京都のとある企業が労働組合や大学教授・弁護士らとともに「草の根の国際交流」を進めようという目的で作った団体でした。企業からの資金的な支援を最大限生かして、フィリピンの都市スラムで厳しい生活を強いられる人々の生活を改善するための活動を地道に進めました。

しかし1990年代後半、その企業の経営が破綻。企業からの支援はなくなり、アクセスはフィリピンの貧困の現状を一人ひとりの日本の市民に丁寧に伝え、共感してくれる人たちと一緒に活動を創っていくというスタイルの市民団体に変わりました。以降、「国際協力を、専門家にしかできない活動にしない」という姿勢が、アクセスの大切な原点になっています。

## ■ 貧困の現実を知るスタディツアー

フィリピンは日本から4時間弱で行ける近所の国ですが、そこで暮らす人々の様子はあまり知られていません。

私自身は学生時代にアクセスが企画したスタディツアーに参加し、フィリピンの貧困の現状が想像以上に深刻であることを知りました。「貧困」というと、「お金や食べものがない」、「絶望的で暗い」というイメージを持っていましたが、実際

に訪れたフィリピンは、そんなイメージとはかけ離れていました。お金がなく、食べるものに困っている人々がたくさんいましたが、そんな中でもジョークがあふれ、日本からの訪問客を笑顔でもてなしてくれました。「貧困＝何もできない弱者」というイメージが壊れ、「貧しくても強くたくましく生きる人々」から元気をもらいました。まさに「百聞は一見にしかず」、実際に現場を訪れることがどれほど大切かを実感しました。

団体設立直後から続くこのスタディツアーで、毎年60人以上の方々を貧困の現場にご案内しています。



スタディツアーでは、都市スラムや農村の家庭を訪問したり、ホームステイも行う

## ■ 住民たちが地域の問題を ■ 解決できるように

持ち前の明るさで貧困を乗り越えようとするフィリピンの人々。しかし、何世代も続く貧困の悪循環（親が低学歴の家庭では収入の少ない仕事

にしかつせず、子どもも低学歴・低収入になりやすい)は明るさだけでは克服できません。NGOなどが支援することで悪循環を断ち切るきっかけを作る必要があります。

巨大なゴミ捨て場周辺にできたスラム「スモークーマウンテン」ではゴミの中から換金可能な鉄、プラスチックなどを拾って売ることによって生計を立てる人々が6,500人ほど暮らしています。大人も子どもも危険を覚悟で、必死でゴミの中で働いています。ゴミの中で見つけてきた野菜や缶詰、フライドチキンの食べ残しなどを再加熱して子どもたちに食べさせる家庭もあります。そんな壮絶な生活の中では、病気やけががあとを絶ちません。

私たちは2006年以降、貧しい住民の中でもやる気のある女性たちを見つけ出し、ヘルスワーカーとして育成してきました。地域の患者たちの最初の手当てをするのは、医者でも看護師でもなく、地域住民の中から育ってきたヘルスワーカーです。私たちNGOは、ヘルスワーカーに研修の機会や医薬品、情報やネットワークを提供しています。

現在、アクセスが建設した多目的保健センターで約10人のヘルスワーカーが当番で勤務し、年間2,000人以上の患者の手当てをしています。地域住民がNGOや専門家の力を借りながら自ら持つ力を最大限発揮し、自分たちの力で地域の問題を解決できるようになってほしいと思います。支援を続けています。



患者の健康相談にのりながら血圧をはかるヘルスワーカー

## 誰にでもできる国際協力

日本では「誰にでもできる国際協力」を広げた

いと、地域の学校などと協力して、さまざまな挑戦をしてきました。中でも、京都市立修学院中学校の生徒会が呼びかけて始まった空き缶集めによるフィリピン支援は、地域も巻き込む形で10年以上続いています。この事例から感じるのは、国際協力は一方的なものではなく、「支援する側も学ぶことがたくさんある」ということです。学校における国際協力では、貧しい人々の現状を知ることを通じて、生徒さんの中に日々の生活への感謝の気持ちが生まれるといいます。支援物資を集めて届ける活動を通じて、物を大切にする気持ち、相手を思いやる気持ち、困っている人たちの役に立つことができるという自尊感情も生まれます。手紙や写真、ビデオレターなどで交流も重ねているため、支援が実際に届いているという実感も持っていただいています。こうした交流は、フィリピンの人々にとっても支えになります。「日本にこうして気にかけてくれる人がいるんだから、頑張らなくて」という気持ちになるのです。

限られた資金や資源を最大限生かして効率よく成果を挙げることは、言うまでもなく大切なことです。けれども、私たちは「相手を思いやること」や「相手に自分たちの思いを伝えること」といった、心の通ったコミュニケーションが貧困の中で生きる人々を励ますという側面、支援する側も励まされるという側面を大切にしたいと思っています。私たちはNGOとして専門性を高めながら、同時に誰もが参加できる国際協力の場を作り続け、国境を越えてみんなで「誰もが幸せに暮らせる世界」を創っていきたくと考えています。



校門前に集められた大量の空き缶と中学生